

氏族仏教と国家仏教の相克-南山城における仏教の受容と展開-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-08-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 正 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/17472

氏族仏教と国家仏教の相克

— 南山城における仏教の受容と展開 —

学位請求者 史学 専攻
中 島 正

内 容 の 要 旨

1. 本研究の問題意識と目的

国家仏教の観点で古代の日本仏教史を概観すると、その定義は実に曖昧であり、一応、大化改新から平安仏教の成立までが広い意味での「国家仏教」の時代と認識され、古代国家権力による仏教の保護と統制を基本的な要素として定義される。しかし、この古代国家の始点を律令国家体制の成立に求めるならば、狭義の「国家仏教」の時代は天武朝以後の奈良時代に限定され、「奈良仏教」と同義となる。さらに、律令国家体制の頂点にある天皇の宗教的権威を構成する神祇と仏教の一元化が揺らぎ分裂する天平期以後を除くと、真の意味での「国家仏教」の時代は、天武朝以後の奈良時代前期(聖徳・養老年間)までに限定されるのである。逆に、「国家」というものをより幅広く捉え、蘇我氏が天皇の外戚として当代ならばものない政治的地位を確立し、法興寺において仏教の保護統制という国家的な役割をになつたと評価すれば、推古朝まで「国家仏教」の形成を遡らせることは可能である。法興寺は蘇我氏の氏寺ではあっても、天武・持統朝でさえ官大寺として特別な存在であった。さらに、国家から国家へとするいわゆる「公伝」のあり方を、天皇の仏教受容の如何に関係なく考えるならば、欽明朝に「国家仏教」の起点を置くこともあながち無理とは言えないのである。ならば、「国家仏教」の内実はどうであろうか。

中央集権的律令国家体制を確立した天武朝は、中央の大寺と国衙単位の地方仏教施設による全国官寺体制を志向して氏寺(私寺)を否定するが、天武・持統朝(白鳳期)は氏寺の造営が全国に爆発的に波及する時期である。奈良時代前期(聖徳・養老年間)には、「寺院併合令」により氏寺の整理統合政策を推進するが、官僧集団の形成と官寺体制の整備が行われた国分寺造営事業の最終的な推進者は、三世一身法、墾田永年私財法の下で力をつけた郡司ら地方豪族層であり、彼らこそ各地の氏寺(私寺)の造営主体者な

のである。日本古代の仏教は、国家権力により保護・統制がなされる従来の「国家仏教」の視点だけではその真相に迫ることはできない。むしろ、「国家仏教」と「氏族仏教」の相克のうちに、その実像があらわれるのではないだろうか。

本論では、考古学的研究手法により、現在の京都府南部地域の南山城における仏教遺跡を対象として、「国家仏教」と「氏族仏教」の相克を視点とする仏教文化の受容と伝播の過程を追うことにより、その特異性と普遍性を論述する。

2. 本研究の構成ならびに各章の要約

第一部「仏教の受容とその主体」では、仏教文化導入の背景として、氏寺造営の主体者である地域豪族の特色とその動向について、南山城の古墳と初期寺院の様相から把握する。第一章「仏教の受容と南山城の前方後円墳」では、まず、3世紀後半の大前方後円墳である椿井大塚山古墳の実態について確認し、「邪馬台国を盟主とする倭国の時代」から「ヤマト王権の時代」への変革期、初代のヤマト王権に拮抗しその権威を簞簞しようとして企てた勢力が『記・紀』に伝承され、しかも箸墓古墳や柳本行燈山古墳などの王陵との結びつきが伝えられていることを示した。そのうえで、椿井大塚山古墳で行われた「二つの墓前祭祀」の比較から、5世紀後半段階で『記・紀』に記載された伝承が、成立していることを示した。

第二章「歴史認識の成立と横穴式石室の導入」では、まず、山城における首長墳の系譜を概観し、古墳時代後期での南山城における突出した勢力の不在状況を把握するとともに、5世紀後半以降の渡来人の動向と横穴式石室の導入について論じた。そして、南山城における古代氏族を概観し、そのうえで、後期古墳と初期寺院の相関関係から、北山城における秦氏と南山城における狛(高麗)氏の動向を顕在化させた。最後に、第三章「仏教の受容と渡来人」で



は、南山城における狛(高麗)氏の渡来からその後の活躍の実態を確認し、仏教文化の導入期にあつてその地理的環境と渡来人の存在が、南山城の仏教文化を大きく特徴付けていることを示した。

第二部「国家仏教の完成と在地寺院」では、南山城における古代寺院とその出土瓦の分析を通して、「在地」の観点から、主に古代寺院にあらわれた「私」的な要素と「公(官)」的な要素を探ることにより、「在地の仏教」と「中央の仏教」両者のあり方を論じた。第一章「飛鳥白鳳寺院の創建」では、まず、南山城における飛鳥白鳳寺院の実態を概観し、高麗寺、蟹満寺、平川麿寺が南山城の拠点寺院として、氏寺でありながら「公(官)」的な要素が強いことを示した。そのうえで、7世紀後半の川原寺式円瓦と瓦葺基壇の採用により、この地域で伽藍造営が急速に進展する様相を示した。

第二章「二つの都城と古代寺院」では、まず、奈良山を介して近接する平城京、南山城に遷都した短命の都・恭仁京の二つの都城が、南山城の既存寺院に与えた影響を概観し、第一章で抽出した拠点寺院に加え、新たに井手寺が造営される様子を確認した。そして、聖武朝における仏教政策と山城における国分寺の造営の実態に迫った。最後に、第三章「国家仏教の完成と崩壊」では、国分寺の造営と大仏造立により国家仏教の完成とも目される聖武朝以後の南山城の寺院を概観し、桓武朝にいたる「山寺」の存在意義を示した。そのうえで、南山城の寺院ネットワークにも変化が生じたこと、国単位での仏教統制の体制が国分寺を中心として成立し山背国衙の影響が大きくなることを論じた。

3. 結論

南山城の仏教遺跡を考える場合、仏教文化の導入期にあつてその地理的環境と渡来人の存在は大きな意義をもつ。時の中央政権が所在する大和国と地方をつなぐ大動脈である大和川と木津川にあつて、奈良山に接する木津川の屈曲部はまさに北の玄関口であり、南山城の地は人と文化が行き交う重要地点である。にもかかわらず、『記・紀』には武埴安彦に代表されるこの地での反乱伝承が頻出する。3世紀末、三十数面の三角縁神獸鏡が出土した椿井大塚山古墳の出現以後、5世紀代には強大な地方勢力は久津川古墳群に引き継がれるが、その勢力が衰退した6世紀代には、古墳で見える限りこの地域での大きな勢力は存在しない。7世紀初頭の仏教文化導入期、南山城は既存の中小勢力と「今来」の渡来人が混在する地域であった。そのような中、この地で蘇我氏との強固な結びつきをもって、高麗寺が造営

されるのである。その背景となっているのは、強力な地域支配勢力による新たな祖先崇拝のシステム導入としての寺院造営ではなく、新たな理念としての仏教文化の受容に適した渡来人としての役割と中央政権の強い意思によるものと考えられる。

日本列島における仏教文化の導入期、旧来の豪族たちの伝統的な富と力を基盤とした「氏姓制度」による秩序は、蘇我氏への権力の集中により淘汰され、結果的に東アジア全体の共通秩序である「律令制」導入へと大きく動き出す。交通の要衝である南山城においては、旧来の勢力はすでにこの時期に弱体化しており、時の中央政権の新たな政治秩序を柔軟に受け入れる素地を持っていた。しかも、モザイク状の地域勢力は、それぞれに新たな秩序の受容体となるのである。その端緒は高句麗系渡来氏族・高麗(狛)氏により開かれる。

南山城における飛鳥白鳳期の寺院造営の伝播は、常に高麗寺を出発点とする。飛鳥寺や川原寺と大津宮周辺寺院との軒瓦の同范別系は、時の中央政権の強い関与を示しており、この状況は平城京・恭仁京・国分寺の造営とも連動する。南山城における中核寺院の存在は、一貫してその官的要素の強さを示しており、氏族の枠を越えた寺院ネットワークを当初の段階からすでに備えていたようである。このことは、我が国の仏教文化受容の特色として脱かれることので多い「氏族仏教から国家仏教へ」とする図式が、この南山城では極めて早い段階で成立していた可能性を示している。あるいは、この図式そのものが存在しないのかもしれない。氏寺としての性格が希薄であることは、この地域の古代寺院における大きな特色とすることが可能である。高麗寺、蟹満寺、平川麿寺の様相には、注目すべきものが特に多い。

奈良時代、諸国国分寺体制が成立すると、南山城の寺院ネットワークにも変化が生じる。国単位での仏教統制の体制が国分寺を中心として成立し、中央政権の強い意思を背景とした中核寺院や官立寺院と中小の在地寺院との二極化が進行するものの、中央政権の意思を介した山城国衙の影響が大きくなるようである。そして、この影響は、神仏習合と相まって山間部に立地する境界の寺に広がる新たな寺院ネットワークを形成していくのである。このことは、従前からの飛鳥白鳳創建寺院の変質を促し、新たに創建された寺院との結びつきを生じさせた。特に、特別な験力を得るため、あるいは特別な儀礼(法会)を必要とする聖地(境界、湧水、岩窟等)に開かれた寺院には、すでに新たな時代の仏教への期待が感じられる。国家仏教の完成を示す山

城国分寺や井手寺に対し、笠置寺、普賢寺、神雄寺（馬場南遺跡）の存在意義は大きい。特に、神雄寺においては、日常的な湧水（聖水）の祀りとともに、特別な儀礼（大規模な燃燈供養、歌会（仏前唱歌）、舞楽等）の様相が明らかとなり、仏堂からは多量の塑像片が出土している。古代寺院における法会の実態を知る貴重な遺例である。

南山城における古代寺院の普遍性と特異性は、仏教文化導入の初期にあつてはその先取性にある。そこには、交通の要衝としての木津川の存在と、渡来人を介した地域勢力のモザイク状構造があつた。しかし、その先取性は中央政権の強力な意思のもとに、氏寺には公（官）的要素が本来備わっていた。このことは、諸国国分寺体制の成立にあつても、国衙の管理体制へのスムーズな順応を可能としたのである。

南山城における古代寺院とその出土瓦を見る限り、従来説かれてきた氏族仏教から国家仏教へとする図式は成立しない。むしろそこにあるのは、古代寺院における公（官）的要素の怪重であり、地域の拠点寺院であるか否かの差である。氏族仏教と国家仏教の相克において、公的側面が表面化していく過程と理解したい。ここに、南山城における古代寺院の普遍性と特異性があるのである。